

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 鴻野わか菜

ロシア象徴主義のみならず、20世紀ロシア文学を代表する文学者の一人アンドレイ・ペールイ(1880-1934)は、詩・批評・小説・自伝などのジャンルで数多くの優れた作品を残しているが、中でも今日最も研究が盛んでまた高い評価を得ているのは『ペテルブルグ』(1913-1914)を代表作とする小説の分野での業績である。しかしこの分野の遺作である大作『モスクワ』3編(1926, 1926, 1933)に関しては、連作小説としては未完に終わってしまった経緯や言語面での過度の難解さの故か、従来の研究が主に伝記的、言語的側面に偏る傾向があったことは否めない。本論文で鴻野氏は近年飛躍的に増大した種々のペールイ関連研究資料を粘り強く博搜し、この作品の総合的解明・解釈に意欲的に取り組んでいる。

まず序論では先行研究の丁寧な吟味と、論文の目的・構成についての明確な説明がなされる。続く第1部では、世界観、思想、時代思潮といった不可視的なものが、登場人物の部屋、持ち物、衣服、さらには建物、風景など可視的なものの描写によって暗示的に表現されるというペールイの象徴主義的文学手法に注目し、作品中で描かれるモスクワという都市のイメージの具体的な細部が綿密に分析される。その結果導き出されるのは、『モスクワ』で描かれる古都モスクワが革命直前当時の古い滅び行くモスクワでありながら、同時に作品執筆当時の抑圧的なソ連的時空間の特徴も備えているというアナクロニズム的状况であり、そこにペールイの新生ソ連体制に対する不信任が密かに示されているとされる。

続く第2部では、第1部で示された背景の前に現れる人物像の周到な分析が行われる。鴻野氏は表面上のストーリーとは別に、小説の隠れた主題は主人公の精神的再生とその失敗であるという仮説を立てる。その実証のため、連作における主人公の精神的発展の跡が綿密にたどられ、科学者である主人公の真理探究と結びつく「見る」という行為の意味が幅広く分析される。その上でさらに作品中に見られるシューベルトの『冬の旅』のモチーフ、聖書のモチーフ、狂気のモチーフがそれを支える重要な傍証となることが説得的に示されている。

審査では方法論や伝記的資料の扱い方についての若干の疑問が呈され、またペールイ自身の時間的変化や文体・言語面の特徴に対する注意が不足しているという指摘などもなされた。しかし、一般読者の理解を拒もうとするかのような小説言語、支離滅裂で荒唐無稽とも感じられる筋立てのため、旧ソ連時代は失敗作と断じられることさえあった連作小説『モスクワ』を再評価し、正当な解釈の出発点に立たせることに成功した力業とも言える功績は審査委員会が一致して認めるところである。

以上により、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位授与に値するものとの結論に達した。